

1 東京都・大阪市中央卸売市場の需給動向(令和6年11月)

野菜振興部 調査情報部

【要約】

- 東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は10万8005トン、前年同月比94.9%、価格は1キログラム当たり306円、同125.8%となった。
- 大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万5295トン、前年同月比94.0%、価格は1キログラム当たり290円、同122.9%となった。
- 2024年9～11月までは、記録的な気温高となった。野菜全般として、今後も年明けから3月まで出回り不足が続き、引き続き高値で推移することが見込まれる。

(1) 気象概況

上旬の旬平均気温は、沖縄・奄美でかなり高く、東・西日本で高かった。沖縄・奄美では旬平均気温平年差が+1.9℃となり、1946年の統計開始以降11月上旬として1位タイの高温となった。旬降水量は、期間初めに記録的な大雨となった所があり、東・西日本ではかなり多かった。西日本日本海側では旬降水量平年比が536%となり、1946年の統計開始以降、11月上旬として1位の多雨となった。沖縄・奄美では、期間末に記録的な大雨となった所があった。旬間日照時間は、北日本太平洋側、東日本日本海側では多く、北日本日本海側、沖縄・奄美では少なかった。

中旬は、全国的に平年に比べ暖かい空気に覆われ、旬平均気温は、東・西日本と沖縄・奄美でかなり高く、特に沖縄・奄美では旬平均気温平年差が+2.6℃となり、1946年の統計開始

以降11月中旬として1位の高温となった。旬降水量は、東・西日本日本海側でかなり少なく、北日本日本海側と北・西日本太平洋側で少なかった。旬間日照時間は、北日本でかなり多く、東・西日本日本海側で多かった一方、東日本太平洋側では少なかった。

下旬は、天気は数日の周期で変わり、旬平均気温は期間の後半に北日本を中心に南から暖かい空気が流れ込んだため、北日本で高かった一方、沖縄・奄美は寒気の影響を受け低かった。旬降水量は、東日本日本海側でかなり多く、北・西日本日本海側と北・東・西日本太平洋側で多かった一方、沖縄・奄美では少なかった。旬間日照時間は北日本日本海側と北・東日本太平洋側で多かった一方、東日本日本海側で少なかった。

旬別の平均気温、降水量、日照時間は図1の通り。

図1 気象概況

	平均気温			降水量			日照時間		
	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬	上旬	中旬	下旬
北日本				日本海側 	太平洋側 	日本海側 	日本海側 	太平洋側 	太平洋側
東日本				日本海側 	太平洋側 	日本海側 	日本海側 	太平洋側 	太平洋側
西日本				日本海側 	太平洋側 	日本海側 	日本海側 	太平洋側 	太平洋側

資料:気象庁「11月の天候」

1 平年を上回る水準 2 平年並み 3 平年を下回る水準

(2) 東京都中央卸売市場

東京都中央卸売市場における野菜の入荷は、

入荷量は10万8005トン、前年同月比94.9%、価格は1キログラム当たり306円、同125.8%となった（表1）。

表1 東京都中央卸売市場の動向（11月速報）

品目	入荷量 (t)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg)	前年比 (%)	平年比 (%)	価格 (円/kg) の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	108,005	94.9	89.9	306	125.8	134.8	286	315	318
だいこん	9,716	85.8	86.0	117	166.5	166.0	104	132	116
にんじん	6,694	99.0	90.4	151	89.6	118.0	119	160	179
はくさい	16,397	103.6	107.9	80	159.8	156.6	89	83	72
キャベツ類	11,572	85.8	78.7	207	198.8	265.2	177	238	207
ほうれんそう	1,608	89.9	98.8	558	140.4	124.9	534	604	538
ねぎ	4,930	111.0	97.0	448	102.7	145.9	408	485	452
レタス類	6,159	92.7	89.5	271	152.6	153.5	223	257	344
きゅうり	3,512	74.7	71.8	683	205.4	205.0	760	726	580
なす	1,570	86.0	79.9	487	135.2	122.3	412	494	571
トマト	2,975	81.3	69.2	739	140.3	145.1	563	693	1,008
ピーマン	1,511	64.6	73.1	713	168.7	171.2	650	699	787
さといも	797	97.5	83.3	314	106.0	111.7	304	311	329
ばれいしょ	6,945	112.2	105.4	131	106.9	102.1	123	129	141
たまねぎ	8,785	125.9	103.8	125	66.4	105.3	114	121	138

資料：東京青果物情報センター「青果物流通月報・旬報」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：豊洲、大田、豊島、淀橋、葛西、北足立、板橋、世田谷、多摩ニュータウンの9市場のデータである。

根菜類は、だいこんの価格が、絶対量不足から堅調な価格で推移し、前年、平年ともに6割以上上回った（図2）。

葉茎菜類は、キャベツの価格が絶対量不足から堅調に推移し、中旬に高騰した。高値で推移した前年の2倍近い価格となり、平年の2.6倍以上の価格となった（図3）。

果菜類は、ピーマンの価格が、絶対量不足に

より堅調に推移し、さらに下旬には、前年を7割近く上回るまで上昇し、平年を7割強上回った（図4）。

土物類は、たまねぎの価格が暴騰した前年からは3割以上下回ったものの、平年をやや上回った（図5）。

なお、品目別の詳細については表2の通り。

図2 だいこんの入荷量と卸売価格の推移

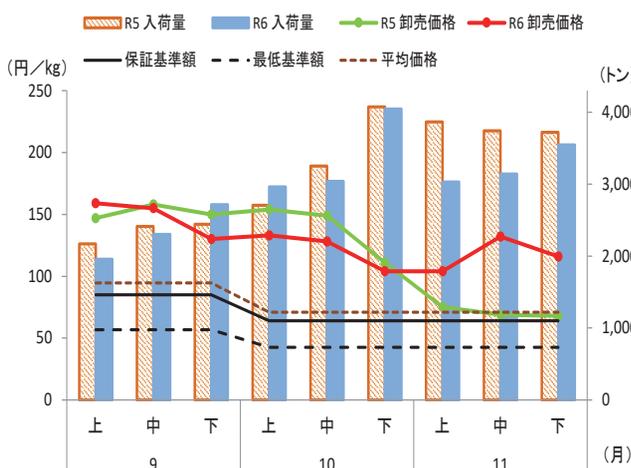


図3 キャベツの入荷量と卸売価格の推移

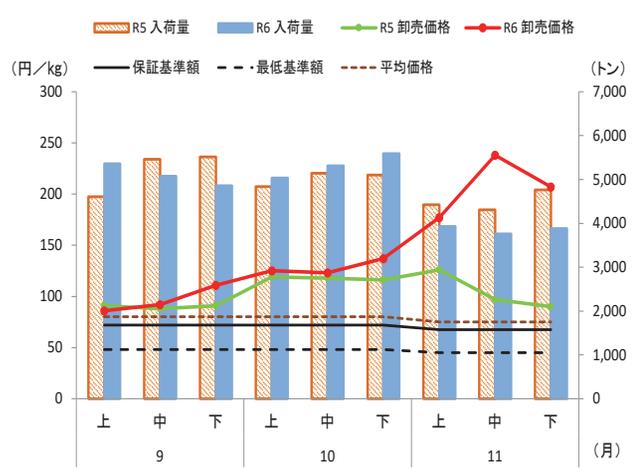


図4 ピーマンの入荷量と卸売価格の推移

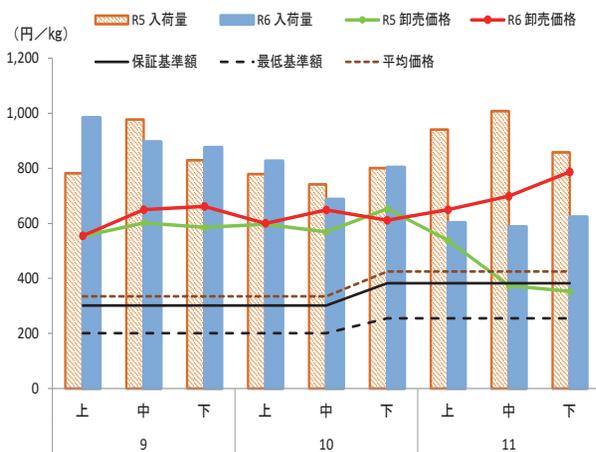
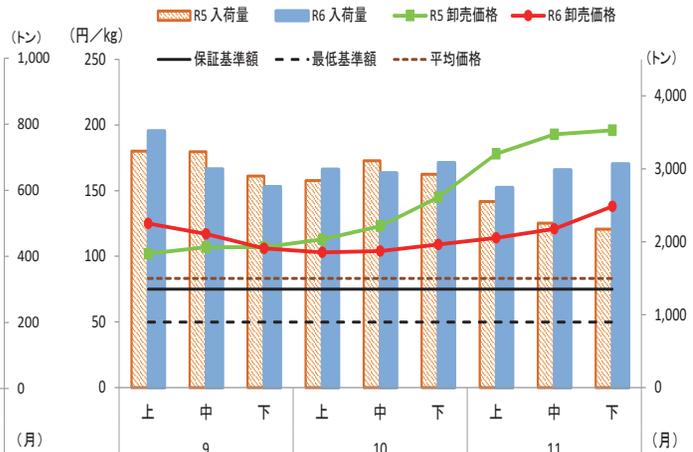


図5 たまねぎの入荷量と卸売価格の推移



資料：東京青果物情報センター「青果物流通旬報」

- ※1 卸売価格とは、東京都中央卸売市場の平均卸売価格で、平均価格、保証基準額および最低基準額とは、関東ブロックにおける価格である。
- ※2 平均価格とは、指定野菜価格安定対策事業（以下「事業」という）における、過去6力年の卸売市場を平均した価格を基に物価指数等を加味した価格である。
- ※3 事業における価格差補給交付金は、平均販売価額（出荷された野菜の旬別およびブロック別の平均価額）を下回った場合に交付されるため、上記の各表で卸売価格が保証基準額を下回ったからといって、交付されとは限らない。

表2 品目別入荷量・価格の動向（東京都中央卸売市場）

類別	品目	11月の入荷量・価格の動向
根菜類	だいこん	千葉産を中心に神奈川産の入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、高温乾燥の影響による初期生育の遅延が散見されたが、気温の落ち着きに伴い生育は回復している。神奈川産の作付面積は前年をやや下回り、9月の高温乾燥の影響で初期生育は遅延していたが、その後の気温低下や降雨で落ち着いてきている。虫害の発生が多く病害も散見される。総入荷量は、前年、平年ともに1割以上下回った。 価格は、絶対量不足から堅調な価格で推移し、前年、平年ともに6割以上上回った。
	にんじん	北海道産、千葉産中心の入荷であった。北海道産の作付面積は前年並みで、一部地域で病害や生理障害が見られたものの、生育はおおむね順調である。千葉産の作付面積は前年並みで、9月までの高温乾燥と台風の影響で一部発芽不良や生育遅延が散見される。輸入の中国産は、前年を4割以上下回った。総入荷量は、少なかつた前年をわずかに下回り、平年を1割弱下回った。 価格は中旬以降に上がり、大幅に高値で推移した前年を1割強下回り、平年を2割近く上回った。
葉茎菜類	はくさい	茨城産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、定植期の高温により遅れが散見されたものの、生育はおおむね順調である。総入荷量は、やや多かつた前年をわずかに上回り、平年をかなりの程度上回った。 長野産の残量が少なく、棚替わりと気温の低下により、価格は堅調な動きとなった。下旬に向け徐々に落ち着いたものの、やや安値で推移した前年を6割弱上回り、平年を5割以上上回った。
	キャベツ類	千葉産、茨城産、愛知産中心の入荷があった。千葉産の作付面積は前年並みで、定植期の高温乾燥および局地的な集中豪雨により初期生育の遅れが散見され、また虫害も多発している。茨城産の作付面積は前年並みで、生育はおおむね順調である。愛知産の作付面積は前年並みで、8月の高温および天候不良により定植が遅れ、その後の高温続きにより、生育はやや不良で、虫害も多い。総入荷量は、少なかつた前年を1割以上下回り、平年を2割以上下回った。 価格は絶対量不足から堅調に推移し、中旬に高騰した。高値で推移した前年の2倍近く、平年の2.6倍以上となった。
	ほうれんそう	群馬産を中心に茨城産、栃木産の入荷があった。群馬産の作付面積は前年並みで、8月下旬以降の高温および局地的な豪雨の影響で生育はやや不良であり、遅延や発芽不良に加えて病虫害も散見された。茨城産の作付面積は前年並みで、高温により夏場の生育が不良であることや、小松菜の価格が堅調であったことから、小松菜への作付けを増やした背景がある。栃木産の作付面積は前年並みで、10月に入り夜温の低下により、生育はやや緩慢になっている。総入荷量は多かつた前年を1割強下回り、平年をわずかに下回った。 月初めから増量の見込みで拡販の動きがあったものの、月間を通して思うように入荷量が増加しなかつたことから堅調な価格が続ぎ、安値で推移した前年を4割強上回り、平年を2割以上上回った。

	 ねぎ	<p>秋田産を中心に青森産、茨城産、北海道産などの入荷であった。秋田産の作付面積は前年並みで、高温乾燥による生育停滞からは回復し太りも順調である。ほぼ前年並みに戻っているが、病害の多発傾向に加え、虫害もやや多い。青森産の作付面積は前年並みで、気温の低下に伴い、軟腐病の発生は落ち着いている。茨城産の作付面積は前年を上回り、夏場の高温と9月上旬の降雨の影響で欠株が見られ、作業の遅れから遅延傾向である。北海道産の作付面積は前年並みで、一部病害が散見されるが、生育はおおむね順調である。関東産の秋冬ねぎは全体的に遅れており、入荷が少なかった。総入荷量は、大幅に少なかった前年を1割以上上回り、平年をやや下回った。</p> <p>価格は、東北産、北海道産の終盤に加え、関東産秋冬作の増量が追い付かず、堅調な動きとなり、大幅に高値で推移した前年をわずかに上回り、平年を4割以上上回った。</p>
	 レタス類	<p>茨城産中心の入荷であった。作付面積は前年をやや下回り、台風による定植作業の遅れに加え、その後の乾燥で小玉傾向となっている。後続産地も台風や高温の影響により定植遅れが散見されている。総入荷量は、少なかった前年をかなりの程度下回り、平年を1割強下回った。</p> <p>価格は、西南暖地が増量できず、下旬に向け上がり、前年、平年ともに5割以上上回った。</p>
果菜類	 きゅうり	<p>埼玉産、宮崎産、群馬産中心の入荷であった。埼玉産の作付面積は前年並みで、高温と日照不足の影響で生理障害が多発している。コナジラミなどの虫害の発生が多く、病害も散見され、作柄はやや不良である。宮崎産の作付面積は前年並みで、天候の影響で10日前後の生育遅延が見られる。群馬産の作付面積は前年並みで、夜温が高く、曇雨天の影響もあり、樹勢低下や生理障害が散見され、病害も見られ作柄は良くない。東北産は上旬までにほぼ切り上がる。総入荷量は、少なかった前年を2割以上下回り、平年を3割近く下回った。</p> <p>価格は、絶対量不足から堅調に推移し、西南暖地に切り替わり始めた下旬に落ち着きを見せたものの、前年並みであった前年の2倍以上となった。</p>
	 なす	<p>高知産中心の入荷となった。作付面積は前年並みで、9月までの異常な高温干ばつで一部生育不良が散見され、現状は回復傾向にあるものの影響が出ている。ヨトウ、コナジラミ類の発生も前年より多い。総入荷量は、少なめに推移した前年を1割以上下回り、平年を2割強下回った。</p> <p>需要期を外れてきたものの、絶対量不足から中旬以降に価格を上げ、やや安値で推移した前年を3割以上上回り、平年を2割以上上回った。</p>
	 トマト	<p>熊本産を中心に愛知産、栃木産などの入荷があった。熊本産の作付面積は前年を下回り、ミニトマトへの移行が進んでいる。高温時の定植で樹勢の低下が顕著であったこと、10月の曇雨天、低温の影響で着色不良が顕著で小玉傾向である。愛知産の作付面積は前年並みで、高温の影響による生育遅延や着果不良、裂果が発生しており、虫害も多く、病害も散見されている。栃木産の作付面積は前年並みで、越冬作は定植後の高温で樹勢が弱く、高温の影響による落花、着果不良に加え、裂果の発生も多い。総入荷量は、大幅に少なかった前年を2割近く下回り、平年を3割強下回った。</p> <p>価格は高値で推移し、さらに下旬に高騰し、暴騰したとされる前年を4割ほど上回り、平年を4割以上上回った。</p>
土物類	 ピーマン	<p>茨城産を中心に宮崎産、高知産の入荷があった。茨城産の作付面積は前年並みで、生育遅延からは回復傾向も、高温障害の影響により樹勢が低下し、全体的に小玉傾向であった。宮崎産の作付面積は前年並みで、高温の影響により病虫害や立ち枯れが発生した。高知産の作付面積は前年並みで、高温少雨による初期着果が不良で、灌水不足による尻腐れ果が散見され、虫害の発生も多かった。総入荷量は多かった前年を3割以上下回り、平年を3割近く下回った。</p> <p>価格は、絶対量不足により堅調に推移し、下旬にはさらに上がり、前年を7割近く上回り、平年を7割強上回った。</p>
	 さといも	<p>埼玉産を中心とした入荷であった。作付面積は前年並みで、主要産地において、他の農作業および11月中の出荷を抑制する動きがあったものの、生育は良好であった。輸入の中国産の入荷はほぼ前年並みとなっている。総入荷量は、少なかった前年をわずかに下回り、前年を2割近く下回った。</p> <p>価格は、気温低下による棚替わりにより堅調な動きとなり、やや高値で推移した前年をかなりの程度上回り、平年を1割以上上回った。</p>
	 ばれいしょ	<p>北海道産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、収穫が終了した。やや干ばつ傾向であったが、気温の上昇と適度な降雨があり、順調に肥大した。総入荷量は、少なかった前年を1割以上上回り、平年をやや上回った。</p> <p>価格はやや安値で推移した前年をかなりの程度上回り、平年をわずかに上回った。</p>
	 たまねぎ	<p>北海道産中心の入荷であった。作付面積は前年並みで、収穫が終了した。天候に恵まれ、中生までは生育が順調であったが、晩生品種はやや作柄が良くなく、小玉傾向であった。輸入の中国産は前年の約半分となっている。総入荷量は、少なかった前年を2割以上上回り、平年をやや上回った。</p> <p>価格は、暴騰した前年を3割以上下回り、平年をやや上回った。</p>

(執筆者：東京シティ青果株式会社 平田 実)

(3) 大阪市中央卸売市場

大阪市中央卸売市場における野菜の入荷は、入荷量は3万5295トン、前年同月比94.0%、

価格は1キログラム当たり290円、同122.9%となった(表3)。

品目別の詳細については表4の通り。

表3 大阪市中央卸売市場の動向(11月速報)

品目	入荷量(t)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)	前年比(%)	平年比(%)	価格(円/kg)の推移		
							上旬	中旬	下旬
野菜総量	35,295	94.0	88.1	290	122.9	138.8	270	303	296
だいこん	2,814	89.2	75.8	147	151.2	175.3	132	161	149
にんじん	2,701	97.7	94.4	171	103.6	137.1	118	176	219
はくさい	6,139	95.6	104.2	103	156.6	170.9	105	113	95
キャベツ類	3,333	76.3	72.7	233	215.9	289.0	200	289	215
ほうれんそう	454	70.9	76.8	736	157.5	144.0	706	788	711
ねぎ	1,115	109.0	100.4	571	103.7	135.7	524	595	593
レタス類	1,109	88.5	77.8	285	161.3	167.2	241	282	353
きゅうり	723	72.1	70.7	661	211.2	212.6	784	691	526
なす	562	96.1	108.5	460	120.7	119.4	396	459	520
トマト	1,028	80.9	82.0	603	128.5	125.3	487	594	820
ピーマン	385	62.4	79.7	747	177.8	179.8	676	736	816
さといも	185	99.9	82.9	419	131.5	136.9	425	424	412
ばれいしょ	2,794	105.5	104.0	133	126.5	109.8	122	130	144
たまねぎ	5,008	125.4	104.3	130	73.9	113.8	119	130	139

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年比は過去5カ年平均との比較。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。

表4 品目別入荷量・価格の動向(大阪市中央卸売市場)

類別	品目	11月の入荷量・価格の動向
根菜類	 だいこん	鹿児島産を中心として、石川産や青森産の残量や、徳島産や和歌山産の入荷などがあつた。九州産地は夏場の高温と干ばつが影響して作柄が悪く、産地出荷量が少なく、入荷量は伸び悩んだ。徳島産と和歌山産は秋の気温高で出遅れ、和歌山産は月間で前年を大幅に下回り、徳島産も前年をかなり下回った。月間全体では、前年をかなりの程度下回り、平年を大幅に下回った。 価格は、絶対量不足に加えて野菜全体の品薄感から高騰し、高値で推移した。月間では前年の1.5倍、平年の1.7倍以上となった。
	 にんじん	月の前半は北海道産が、月の後半は長崎産が主体となる入荷であつた。北海道産は不作だった前年を全旬とも大きく上回ったが、切り上がり早く入荷量自体は中旬以降に激減した。長崎産は夏場の高温と干ばつの影響で生育が悪く、出荷が出遅れた上に玉伸びも悪く、小玉傾向で月間入荷量は前年の3分の1以下となった。香川産の金時人参の入荷もあつたが、夏場の高温と干ばつの影響で色付きが悪く、肥大も遅く細物傾向となり、産地出荷量が少ない状況が続いた。月間では、前年をわずかに下回り、平年をやや下回った。 価格は、絶対量不足に加えて野菜全体の品薄感による高値傾向の影響を受け、また端境が生じたことで中旬以降に上昇を続けた。月間では、不作で高値だった前年をやや上回り、平年を大幅に上回った。
葉茎菜類	 はくさい	茨城産が中心の入荷であつた。上旬までは長野産の残量入荷もあつたが気温高の影響で切り上がり早く、前年を下回った。秋冬産地は定植期の気温が高すぎたことにより出遅れ、さらに生育不良が多発し産地出荷量が少ない状況が続いた。中旬以降は回復傾向となったが入荷量は伸び悩んだ。月間全体では前年をやや下回り、平年をやや上回った。 価格は、品薄感から高値となり、気温も下がってきて需要期を迎えたことで引き合いも強まり、端境が生じた中旬に高騰した。下旬には回復傾向となりやや下落したが、月間では前年の1.5倍以上、平年比1.7倍となった。
	 キャベツ類	愛知産と茨城産が主体となり、群馬産や長野産の残量入荷などがあつた。愛知産が夏場の高温と干ばつに加えて、前月まで記録的な気温高が続いた影響により出遅れ、全旬を通じて前年の半分程度の入荷となった。茨城産は前年並みに入荷するも、全体として産地の切り替えがスムーズにいかずに端境が生じた。月間全体では前年、平年ともに大幅に下回った。 価格は、絶対量不足に加えて野菜全体の高値の影響で高騰が続いた。月間では前年の約2.2倍、平年の2.9倍となった。
	 ほうれんそう	徳島産が主体となり、岐阜産など夏秋産地の残量や後続の福岡産など秋冬産地の入荷などがあつた。夏秋産地は気温高の影響で切り上がり早く、秋冬産地は気温高と多雨の影響で生育が悪く、産地出荷量が少ない状況が続く、全体としては全旬とも入荷量は伸び悩んだ。月間では前年、平年ともに大幅に下回った。 価格は、品薄感に加えて野菜全体の高値の影響から高値で推移し、月間では前年の1.5倍以上、平年の1.4倍以上となった。

	<p>ねぎ（白ねぎ）</p> <p>長野産が中心となり、群馬産や鳥取産、また、北海道産の残量入荷などがあつた。長野産は産地残量が多く、前月までは気温高で需要が鈍かつたが、11月に入り一気に気温が下がり引き合いが強まったことで需要が高まり、旬を追うごとに入荷量が増加した。月間全体では、前年を大幅に上回つた。</p> <p>価格は、入荷量が多かつた一方で、野菜全体の高値の影響と需要期に引き合いが強まったことから、高値で推移した。</p>
	<p>ねぎ（青ねぎ）</p> <p>徳島産と香川産が主体となり、高知産や近隣の奈良産、大阪産などの入荷があつた。11月までの記録的な気温高の影響により生育不良となり、各産地とも産地出荷量が少ない状況が続いた。主力の徳島産は月間で前年をかなり下回つた。月間全体では、前年を下回つた。</p> <p>価格は、不足感から高値で推移し、旬を追うごとに上伸を続けた。月間では前年をかなり上回つた。</p>
	<p>レタス類</p> <p>玉レタスのラップ物は茨城産と兵庫産が主体となり、裸物は長崎産が中心となつた。各産地とも夏場の猛暑と干ばつの影響により生育が悪く、産地出荷量が少ない状況が続いた。主力の兵庫産は、月間で前年を大幅に下回つた。月間全体の入荷量は前年を下回つた。サニーレタスは主力の福岡産が主体となり、茨城産や兵庫産の残量入荷があつた。各産地とも夏場の気温高の影響により、産地出荷量は少ない状況であつたが、野菜全体の高値と不足感からサニーレタスの特売需要が多く、前年実績の少ない産地にも要請をかけて入荷したため、全体としては入荷増量となつた。月間全体の入荷量は、前年を大幅に上回つた。リーフレタスは、主力の福岡産を中心に茨城産や香川産などの入荷があつた。産地出荷量は多くない状況の中で、野菜全体の品薄感により価格が高騰したため加工筋からの発注が多く、引き合いが強まったため、産地に要請をかけて入荷増量となり、月間全体の入荷量は前年を上回つた。レタス類全体では玉レタスの入荷量が少なかつたことが影響し、月間全体で前年をかなり大きく下回り、平年を大幅に下回つた。</p> <p>価格は、玉レタスは絶対量不足から高騰し、野菜全体の高値の影響もあり、旬を追うごとに値上がりした。月間では前年を大きく上回つた。サニーレタスは特売需要で引き合いが強まったことから高値で推移し、月間では前年を大きく上回つた。リーフレタスも引き合いが強くなり、月間では前年を大きく上回つた。レタス類全体でも単価高となり、月間では前年、平年とも1.6倍以上の価格となつた。</p>
	<p>果菜類</p> <p>きゅうり</p> <p>宮崎産を中心に高知産、大阪産、群馬産が主体となる入荷であつた。定植期の気温高で作業が遅れ、産地出荷も遅れ、月の前半は産地出荷量が少なかつた。加えて11月までの記録的な気温高で生育不良となり、月の後半の出荷量も伸びず、全旬を通じて入荷量が少ない状況が続いた。主力の宮崎産の入荷量は、月間で前年を大幅に下回つた。月間全体の入荷量は、前年、平年ともに大幅に下回つた。</p> <p>価格は、絶対量不足に加えて、野菜全体の高値感から上旬に高騰し、旬を追うごとに下落傾向となつたものの、月間では前年、平年ともに2倍以上となつた。</p>
	<p>なす</p> <p>千両系は高知産が主体となり、岡山産や京都産などの入荷があつた。長茄子は、福岡産と熊本産が主体となる入荷であつた。11月までの気温高の影響で、夏秋産地が前進出荷となり産地残量が少なく、産地出荷量が少なかつた。月間全体では前年をやや下回り、平年をかなりの程度上回つた。</p> <p>品薄感に加えて野菜全体の高値の影響から、価格は高値で推移し、旬を追うごとに上伸した。月間では前年、平年ともに大幅に上回つた。</p>
	<p>トマト</p> <p>月の前半は夏秋産地の岐阜産が、後半は後続の愛知産、熊本産が主体となり、岡山産や石川産の残量入荷などもあつた。夏秋産地は11月までの気温高の影響により切り上がり早く、中旬以降の入荷量は激減した。後続の産地は出遅れて中旬以降に端境が生じ、入荷量が少ない状況が続いた。月間全体では前年、平年とも大幅に下回つた。</p> <p>価格は、絶対量不足と野菜全体の高値感から、旬を追うごとに上昇し、月間では前年、平年ともにを大幅に上回つた。</p>
	<p>ピーマン</p> <p>宮崎産と高知産が主体となり、その他各産地の入荷もあつた。定植期の気温高により作業が遅れ、産地出荷も遅れたため月の前半は入荷量が少なかつた。11月までの記録的な気温高で樹体が徒長、軟弱化し開花数も少なく産地出荷量が少ない状況が月の後半まで続いた。月間全体では前年、平年ともに大幅に下回つた。</p> <p>価格は、絶対量不足に加えて野菜全体の高値感から高値となり、旬を追うごとに上昇した。月間では前年、平年ともに1.7倍以上となつた。</p>
	<p>土物類</p> <p>ざといも</p> <p>愛媛産が主体となり、山形産の^{えびいも}入荷などもあつた。年末商材の海老芋は、静岡産を中心として、奈良産や大阪産の^{えびいも}入荷もあつた。夏場の猛暑と干ばつにより生育不良となり、産地出荷量が少ない状況であつたが、野菜類全体の不足感と11月に入ってから気温が下がつたことで引き合いが強まり、安定した入荷が続いた。輸入の中国産も前年比5倍以上の^{えびいも}入荷となつた。月間全体では前年並みで、平年を大幅に下回つた。</p> <p>価格は野菜全体の高値感もある中で引き合いが強まったことにより高値で推移した。月間では前年、平年ともに大幅に上回つた。</p>
	<p>ばれいしょ</p> <p>丸芋は、北海道産が中心となる入荷で、下旬には後続の長崎産の^{えびいも}入荷も開始した。北海道産は大玉傾向で産地出荷量が多く、順調な^{えびいも}入荷を続け月間では前年を大幅に上回つた。長崎産は11月までの気温高の影響で出遅れ、前年の5分の1程度^{えびいも}の^{えびいも}入荷量であつた。メークインは北海道産が中心となり、夏場の猛暑の影響により月の前半は産地出荷量が少ない状況となつた。下旬には回復し入荷増となり、月間では前年をやや上回つた。ばれいしょ全体の月間^{えびいも}の^{えびいも}入荷量は、前年、平年ともにやや上回つた。</p> <p>価格は、野菜全体の高値の影響もあり、旬を追うごとに上昇した。月間では前年を大幅に上回り、平年をかなりの程度上回つた。</p>
	<p>たまねぎ</p> <p>北海道産を中心に、兵庫産の^{えびいも}入荷もあつた。北海道産は順調な^{えびいも}出荷が続き、少なかつた前年より全旬を通じて^{えびいも}入荷量が多い状況が続き、月間では前年の1.8倍となつた。兵庫産は産地残量が少なく^{えびいも}入荷量は全旬を通じて少ない状況となり、月間では前年を大幅に下回つた。月間全体では北海道産の^{えびいも}入荷増から前年を大幅に上回り、平年をやや上回つた。</p> <p>価格は、不作で極端な高値だつた前年を大幅に下回り、野菜全体の高値感もあり、また他の野菜が少ない中で引き合いもあつたことで旬を追うごとに上昇し、平年をかなり大きく上回つた。</p>

(執筆者：東果大阪株式会社 新開 茂樹)

(4) 首都圏の需要を中心とした1月の見通し

2024年9～11月まで記録的な気温高となり、直近2年を毎年更新する状況であった。11月前半は雨が多く、秋冬野菜の播種と重なったため、作型によっては根の活着が悪かった。果菜類は病気の発生も多く、夜温が高く実に栄養が回らず、木ボケ（茎葉が茂り、着果が悪い状態）になりがちであった。比較的気象災害に強いとされる土物のいも類は、仕上がりにばらつきが出ている。野菜全般として、今後も苗半作（苗の出来により作柄の半分が決まるという意味）の影響を受け、年明けから3月まで出回り不足は続き、引き続き高値で推移することが見込まれる。

根菜類



だいこんは、千葉産は12月上旬までは例年の80%程度の出荷となっている。徐々に回復し、1月は例年並みの出荷と予想している。11月の天候は安定しており、生育の前進などはなかった。神奈川産は、生育時期に高温かつ土壌中の水分が多かったことにより、葉ばかり茂り、肥大が遅れた。12月上旬は箱数が伸びない状況が続き、平年並みの大きさに切り替わるのは年明け以降と予想される。徳島産は11月上旬から本格開始し、前年並みの出荷が続いている。若干小ぶりの物の出荷が続いたが、ここに来て肥大し、Lサイズ中心になってきた。引き続き1月も前年並みの潤沢なペースが続くと見込まれる。静岡産は例年並みの12月5日から開始し、ピークは年明けから2月まで続くと見込まれるが、その後は多少減少しながら4月まで推移すると予想される。生育は順調で、2Lサイズ中心である。大分産は10月に雨が多く、播種が思うように進まなかったため、2～3月に少なくなることが見込まれる。12月上旬時点では順調に生育しており、1月までは前年並みと予想される。

にんじんは、千葉産は11月下旬の降雨の影響により12月上旬時点での出荷は少なめである。12月末頃には平年並みに回復しピークとなり、翌2月までは多いものの全体的に小ぶりの仕上がりで、出荷量は前年比減と予想される。

葉茎菜類



キャベツは、愛知産は11月下旬時点では前

年比56%と大幅に少なかった。初期の外葉展開期が猛暑の時期に当たり外葉が大きくなれず、肥大せず小玉に仕上がったことが要因である。年内いっぱいはいは少なく、1月以降は回復が見込まれる。春系は順調であり、問題なく出荷される見込みである。千葉産は12月上旬までは例年の70%と少なかった。病害で収穫量の減が主要な要因である。12月10日過ぎから増えて、1月は例年並みと見込まれる。中心サイズはLであるがMも多く、前年比90%程度と予想される。神奈川産は8月10日までの播種物は気温高と乾燥の影響によりかなり少なかった。12月に入り8月の盆明け頃の播種物の出荷となるが、外葉が小さく小ぶりに仕上がっている。年明けは低温に強い品種が増え、12月上旬よりも良くなってくると見込まれる。静岡産の「キャンディーキャベツ」は例年通り1～2月を中心に出回るが、夏の暑さの影響を受け、例年の60%程度と予想される。

はくさいは、茨城産は順調で12月のピークに入っている。寒さが本格的でないためわずかに締まりが悪いものの、例年どおりの良好な仕上がりになっており、1月も前年並みに順調に出荷されることが見込まれる。

ほうれんそうは、群馬産の生育は順調で、年明けも年内同様の出荷が予想される。11月までの気温高により12月上旬は例年よりやや伸びが足りない。栃木産は年末に向けて増えるが、1月には露地やハウスの他にトンネル物も開始する見込みである。前年の5%程度増と順調な入荷が見込まれる。ちぢみほうれん草も開始するが、10月に播種した物の発芽率が悪く、例年より大幅に少ないと予想される。埼玉産は前年の価格安の影響による作付け減により12月上旬の出荷は少なく、12月後半に増えるが、1月は前年を下回ると予想される。

ねぎは、茨城産の秋冬物が本格的に開始したが、夏の猛暑を受け前年と同様に少なめであった。11月下旬までは、病気の発生による遅れや、肥大不足などにより少なかったが、12月上旬時点では回復してきている。平年並みの量となるのは1月に入ってからの見込みである。千葉産は12月上旬時点で平年比70%程度の出荷実績と、遅れて少なかった前年よりもさらに遅れている。12月中旬には肥大し平年並みに追いつき、

年末から2月までピークとなる見込みである。

レタスは、兵庫産は12月上旬時点で例年の60～70%と出荷が少ないが、年明けから回復に向かう見込みである。本来のピークは1～2月であるが、この時期に出荷されるものの作付けを減らしており、3月となる可能性もある。香川産は12月に入り平年並みの出荷となっているが、11月までは虫害の発生などで少なかった。1月も引き続きピークで、例年並みの出荷となるが、2月には減ってくると見通している。静岡産は高温傾向の中での生育で、特に虫害が影響し出荷が少なめとなっている。12月10日前後から例年並みに回復し、1月も引き続きピークとなり、2L・Lサイズを中心とし、例年並みの出荷が予想される。長崎産は11月末の時点で、生育の遅れはないが作付けを後半にずらしたため、前年を下回る出荷となっており、12～翌1月は前年並みの出荷と見込まれる。

果菜類



きゅうりは、宮崎産は12月上旬は回復過程にあり、年末から1月は例年どおりの出荷が予想される。長期一作の作型となっているが、作付けの減少もあり前年比でやや少なめとなる見込みである。群馬産は12月10日から定植した物の出荷が1月20日過ぎから開始し、年明け定植の物が2月20～25日に開始し、促成作が出そろうことになり、ほぼ前年並みが予想される。高知産は12月初め頃までは出遅れ、例年の70%と少なかった。10～11月の気温高と多雨により12月初め頃までは出遅れ、例年の70%と少なかった。今後は本稼働して、1月は平年並みに出荷されることが見込まれる。

なすは、高知産は10月の気温高で花落ちし、12月上旬の出荷は少なかった。12月中旬には回復し、1月は増量して平年を上回ると予想される。茎の作りが例年より弱い、厳寒期は問題なく、春先に影響が出てくる可能性がある。福岡産は年末は12月上旬よりも少なく、1月も前年と同様に少なくなり、2月に入って増え始めると予想される。作付けは前年の98%である。

トマトは、愛知産は高温障害で花落ちしたことにより、例年の80%の出荷実績となっている。12月後半には例年に近い数量に回復し、1月は前年並みと予想される。当面はMサイズ中心で

ある。熊本産は12月上旬は冷えこんできて暖房効果も発揮できず、少なめで推移する見込みである。12月中旬以降は、少し増加すると予想されるが、状況としては不作年の傾向であり、1月も例年を下回ると予想される。佐賀産は12月に入っても夜温が高く木が伸びすぎて、3段目が着果しておらず、さらにコナジラミの発生でウイルス病も見られ、株ごとダメージを受けているところもある。今後の作柄は良くなっていくが、例年を下回り小玉傾向と予想される。

ピーマンは、茨城産は12月に入り少なめの出荷が続いているが、秋ピーマンは切り上がり時期を迎えている。年明けは温室物のみとなり、資材費の高騰により作付けは減っている。温室物は根の張りが悪く、収量が上がっていない。12月に晴天が続けば、着果したものが1月には間に合うものの、前年を下回ることが予想される。高知産は11月までは少なかったが、12月には平年並みに回復し、年末にやや減り、1月には再び増えてくる見込みである。作付けは前年並みである。宮崎産は10月の天候不順で着果が少なく、樹勢が旺盛となった。年末から翌1月にかけて増えて来るが、3月に入ってから出荷が大きく伸びると予想されるものの、全体的にはやや不作傾向と見込まれる。

土物類



さといもは、埼玉産は12月上旬時点で前年の110～120%と多く出荷されている。年明けは例年通りに落ち着くが、引き続き前年より多い出荷が予想される。貯蔵物は4月までの出荷と見込まれる。宮崎産の京芋は年内に多く、1月には減り1月末には切り上がる見込みである。曇天が続く害虫の発生もあり、M・Lサイズ中心の小ぶりの仕上がりである。

ばれいしょは、北海道産（道北）の収穫量は、例年並みかやや多く、肥大は圃場ほらばによるばらつきが大きいものの、Lサイズ中心である。品種は「男爵」を中心に「きたあかり」と「きたかむい」があり、年明けから2月までの出荷で「きたあかり」は年内で切り上がると予想される。北海道産（十勝）のメークインは、12月上旬までの収穫量は例年並みであるが、変形果などが多く正品にならないため、全体としては平年比20～30%程度減少する見込みである。1月に

入ると年内より大幅に出荷を絞り込み、例年より1カ月以上早く1月中旬に切り上がる見込みである。「とうや」も「男爵」も1月中旬まで、「マチルダ」は契約のみである。北海道産（道南）の「今金男爵」は、2024年産は平年よりやや多いが、中心サイズはLまたはLMで、2Lの大きめの物が少ない。市場出荷は2月初めまでの計画とのことである。

たまねぎは、北海道産（道北）は中生品種中心の産地であるが、大玉傾向で平年作を上回っており、サイズはL大中心で1月で切り上がる見込みである。北海道産（道東）の生産量は前年並みで、年明け販売は年内よりは減るが、5月初め頃まで続き、ほぼ例年と変わらない。サイズは、L大・L中心となっている。静岡産の新たなまねぎは「ホホワイト」「黄玉」ともに1月4日の出荷からとなる。ほぼ例年同様「ホホワイト」のピークは1月で、2月に少なくなってくる見込みであり、「黄玉」は2月がピークである。生育時期の多雨が影響し、全体的に出遅れ傾向にあるが、作付けは前年並みである。

その他



ブロッコリーは、愛知産は定植時期の猛暑、その後の長雨で腐りが発生したため、12月上旬時点で例年の30～40%と出荷が少ない。引き続き12月いっぱい少なく、1月に入り回復して例年並みに追いつくと予想される。香川産は盆明けの定植物は一部で苗が暑さの影響を受けたが、12月上旬時点では順調に生育しており、1～2月がピークになると見込まれる。群馬産は12月上旬時点では定植時期の暑さが影響し、小ぶりの仕上がりととなっているが、1月には前年並みに回復すると予想される。

カリフラワーは、福岡産は11月2日の大雨と満潮が重なり排水できず、浸水の影響により大幅に遅れており、例年のピークは12～翌2月であるが、例年の30%程度の出荷と予想される。

ごぼうは、青森産の収穫はほぼ終わり、今後は冷蔵物の出荷になり雪解けの4月から春掘りとなる。収穫量は長さはあるが太くないため前年ほど多くないが、1月の出荷はL・Mサイズを中心に平年並みと予想される。

れんこんは、茨城産は11月までの実績は前年比90%と少なめで、ピークは12月で年明けは

落ち着く見込みであるが、猛暑の影響で傷みが早く、切り落として出荷しており、さらに本数も少ない傾向にあり、前年を下回ると予想される。太さは問題なく、Mサイズが中心である。

かんしょは、千葉産は年明けも12月と同様の出荷ペースと予想される。年内は「シルクスイート」中心で、4月までは「べにはるか」が中心となり、いずれも平年並みの見通しである。徳島産は9～10月は少なめの出荷であったが、年明けは平年並みでLサイズ中心の出荷が見込まれる。

やまのいもは、北海道産の収穫量は前年より少なく平年より多い。11月中旬まで計画的に出荷されるが、干ばつの影響により細くて大ぶりの物が中心となる見込みである。

いちごは、栃木産は「とちあいか」が80%を占め、1番果（頂果房）は12月上中旬がピークとなり平年並みである。1月には2番果（腋果房）に替わるが、谷間はない見込み。福岡産の早期作は12月上中旬で終わるが、例年より進んでおり、その後、普通ポット物の頂果房が12月上旬頃から始まりクリスマス頃にピークとなる。大玉でとさか型の物が多くケーキには適さない。年末年始は少なく、早期物の2番果が1月10日前後から始まり、1月下旬頃にピークを迎えると予想される。例年と比べて頂果房と腋果房の間の葉が2枚程多く、出荷の谷間が大きくなると見込まれる。

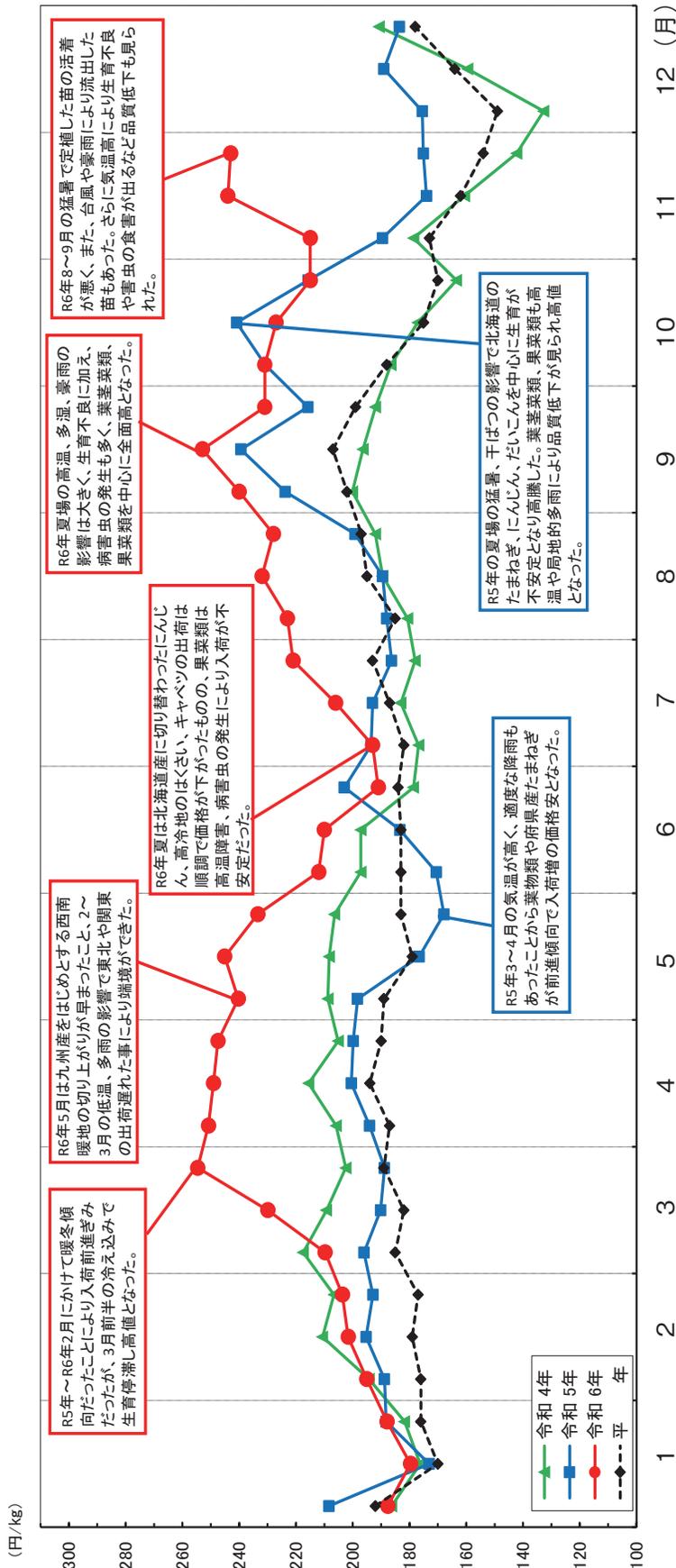
スナップえんどうは、鹿児島産は、やや後ろにずれているが、12月に1回目のピークが来て、1月は平年並みのお荷が見込まれる。そらまめは通常年内にある程度出荷されるが、今年はほとんど期待できない。年明けから開始するが、作柄そのものは順調である。グリーンピースは12月は少ないが、1～4月まで安定出荷が見込まれる。

ナバナは、千葉産は3月の節句需要の出荷の充実のため品種を変えたことから年末から1月は前年を下回ると予想される。結束タイプは減って、100グラム詰めFGバック（ビニール袋）物が主体となり、その他バラ詰めの5キログラム箱も出荷されると見込まれる。

（執筆者：千葉県立農業大学校

講師 加藤 宏一）

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (東京都中央卸売市場)



(単位：円/kg)

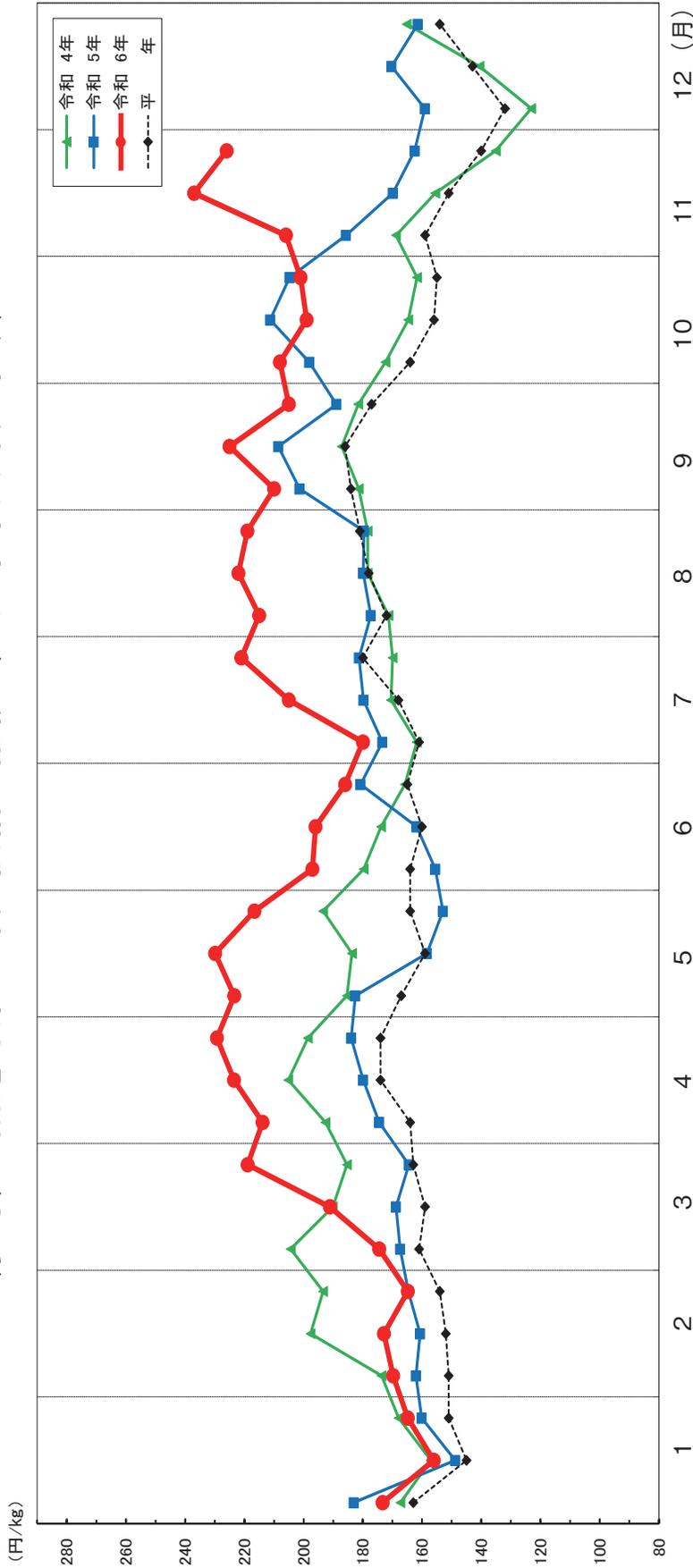
	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月														
	上旬	中旬																																			
令和4年	186	176	182	194	211	207	217	209	202	206	216	205	209	208	206	197	197	179	177	183	178	181	189	192	200	196	192	187	177	163	179	161	142	133	160	191	
令和5年	208	173	188	189	195	193	196	190	189	194	200	200	198	177	168	171	183	203	194	193	186	188	189	199	224	239	216	231	241	216	190	174	175	175	189	184	
令和6年	188	180	188	195	202	204	210	230	255	251	249	247	240	245	233	212	210	191	193	206	221	223	232	228	240	253	231	231	227	215	215	244	243				
平年	192	170	176	176	179	177	185	182	189	187	194	190	189	179	183	183	183	184	182	187	193	185	195	197	202	207	199	188	175	170	173	162	154	149	164	178	

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（令和元年～令和5年）の旬別価格の平均値である。

注2：豊洲市場、大田市場、豊島市場、淀橋市場の4市場のデータである。

(参考) 指定野菜の卸売価格の推移 (大阪市中央卸売市場)



(単位：円/kg)

	1月		2月		3月		4月		5月		6月		7月		8月		9月		10月		11月		12月													
	上旬	中旬	下旬																																	
令和4年	167	157	168	174	198	193	204	190	185	193	205	199	185	184	193	180	174	166	162	170	170	171	178	178	181	187	182	172	165	162	169	156	135	123	141	165
令和5年	183	149	160	162	161	165	167	169	165	174	180	184	182	158	153	155	162	181	173	180	181	177	180	180	201	209	189	198	211	205	186	170	162	159	170	161
令和6年	173	156	165	170	173	165	174	191	219	214	224	229	230	217	197	196	186	180	205	221	215	222	219	210	225	205	208	199	201	206	237	226				
平年	163	145	151	151	152	154	161	159	163	164	174	174	167	159	164	160	165	161	168	180	172	178	181	184	186	177	164	156	155	159	151	140	132	143	154	

資料：農林水産省「青果物卸売市場調査」

注1：平年とは、過去5力年（令和元年～令和5年）の旬別価格の平均値である。

注2：大阪本場および大阪東部市場のデータである。